

# 松山天狗

季は	地は	ツレ	シテ	後	シテ	ワキ	前
春	讃岐	相模	崇德	院	老翁	西行	

「風の行方をしるべにて。く。松山にいざや急がん。

詞 「是は嵯峨の奥に住居する西行法師にて候。さても新院本院位を争ひ。新院うち負け給ひ。讃岐の国へ流され。松山と申す処にてほどなく崩御ならせ給ひたるよし承り及び候ふほどに。御跡弔ひ申さん為めに。唯今讃岐の国へと急ぎ候ふ。

道行 「思ひ立つ。心も西に行く月の。く。幾夜な夜な

の仮枕。その数いさや白雲の。斯かる旅寐を過し来て。讃岐の国に着きにけり。く。

詞 「急ぎ候ふほどに。讃岐の国に着きて候。人を相待ち新院の御廟処松山を尋ねばやと思ひ候。

シテ一声 「道芝の。露踏み分くる通路の。山風さそふ心かな。

ワキ詞 「いかに是なる尉殿。御身は此あたりの人にてましますか。

シテ詞 「さん候是は此あたりの者にて候。御僧は何くより

何方へ御通り候ふぞ。

ワキ

「是は都嵯峨の奥に住居する西行と申す者にて候ふ  
が。新院この讃岐の国へ流され給ひ。ほどなく崩  
御ならせ給ひたる由承りて候ふほどに。御跡を弔  
ひ申さん為め是まで参りて候。松山の御廟所を教  
へて賜はり候へ。

シテ  
「さては天下に隠れなき西行上人にてましますか  
や。先づあれに見えたる大山は白峯と申す高山な  
り。少しあなたに見え候ふこそ。新院の御廟所松  
山にて候へ。御道しるべ申さんと。御僧をいざな  
ひ奉り。

地  
「行方も知らぬ旅人に。く。はや馴れそめて色々  
の。情ある言の葉の。心の内ぞありがたき。まだ  
踏みも見ぬ山道の。岩根を伝ひ谷の戸の。苔の下  
道たどり来て。風の音さへ冷ましき。松山に早く  
着きにけり。く。

「是こそ新院の御廟処松山にて候へ。なんぼうあさましき御有様にて候ふぞ。

「さては是なるが新院の御廟にてましますかや。昔は玉樓金殿の御住居。百官卿相にいつかれ給ひし御身の。かかる田舎の苔の下。人も通はぬ御廟処のうち。涙も更にとゞまらず。あら御痛はしや候。かくあさましき御有様。涙ながらにかくばかり。よしや君昔の玉の床とても。からん後は何にかはせん。

シテ  
「あら面白の御詠歌や。賤しき身にも思ひやりて。西行を感じ奉れば。

ワキ  
「實にや処も天ざかる。

地  
「鄙人なれどかくばかり。く。心しらるゝ老の波の。立ち舞ふ姿まで。さもみやびたる氣色かな。春を得て咲く花を。見る人もなき谷の戸に。鳴く鶯の声までも。処からあはれを。催す春の夕べか

な。

ワキ詞

「如何に尉殿。君御存命の折々は。いかなる者か参り御心を慰め申して候ふぞ。

シテ詞

「君御存命の折々は。都の事を思し召し出だし。御逆鱗の余りなれば。魔縁みな近づき奉り。あの白峯の相模坊にしたがふ天狗ども。参るより外は余の参内はなく候。かやう申す老人も。常々参り木陰を清め。御心を慰め申しきなり。さても西行唯しほるなり。

地  
「暇申してさらばとて。又立ち帰る老の波。翁さびしき木の本に。立ち寄ると見えしが。影の如くに失せにけり。 (申入)

後ジテ  
「五蘊もとより皆是空。何によつて平生の身を愛せん。軀を守る幽魂夜月に飛ぶ。いかに西行。是まではるぐ下る心ざしこそ。返すぐも嬉しけれ。

又唯今の詠歌の言葉。肝に銘じて面白さに。いで  
く姿を顯はさんと。

地「いひもあへねば。御廟しきりに鳴動して。玉体あ  
らはれおはします。誠に妙なる玉体の。く。花  
の顔ばせたをやかに。こゝも雲井の都の空の。夜  
遊の舞楽は面白や。 (舞)

地「かくて舞楽も時過ぎて。く。御遊の袂を返し給  
ひ。舞ひ遊び給へば又古への。都の憂き事を思し  
召し出だし。逆鱗の御姿。あたりを払つて恐ろし  
や。

地「あれくく見よや白峯の。く。山風あらく吹き落  
ちて。神鳴り稻妻しきりに満ちく。雨遠近の雲  
間より。天狗の姿は顯はれたり。

ツレ「そもそも是は。白峯に住んで年を経る。相模坊と  
は我事なり。さても新院思はずも。此松山に崩御  
なる。常々参内申しつゝ。御心を慰め申さんと。

小天狗を引き連れて。

地「翅を並べ数々に。く。此松山に隨ひ奉り。逆臣の輩を悉く。取りひしき蹴殺し。会稽をすゝがせ申すべし。叡慮を慰めおはしませ。

シテ「其時君も悦びおはしまし。

地「其時君も悦びおはしまし。御感の御言葉数々なれば。天狗もおのく。頭を地につけ押し奉り。是までなりとて小天狗を。引きつれ虚空にあがるとぞ見えしが。明け行く空も白峯の。明け行く空も白峯の梢に。又飛びかけつて失せにけり。